

エッセイ

詩歌<sup>うた</sup>人<sup>た</sup>たち<sup>び</sup>との縁<sup>と</sup>

斉藤 光悦

## 鎌倉瑞泉寺と秀雄、方代

みどり濃く木々生い茂るなかを、はっはっと思をはき、ホーホケキョと聞こえよがしな鶯の声を耳にしながらか、濃緑に苔むした急な石段を昇っていた。こちらは男坂。初夏とはいえ、まだ汗が流れ落ちるといふほどの暑さではない。よく掃除され踏み滑りのなさそうな緩やかな女坂もあったが、おれは男だし、などと下らぬ見栄を張ったわけである。石段を登り切ると山門があり、そこを抜ければ本堂のある境内だ。鎌倉二階堂、瑞泉寺。もちろん由緒ある名刹であるが、その日の来訪は信仰とも観光とも関係はない。歌びと吉野秀雄を語る会「坤心忌」。二年前の七月第一土曜日、私は短歌をめぐる様々な人間の縁に会いに行ったのだ。

坤心忌は五十年ほど前から瑞泉寺で催されている。その年の講演者は、歌人加藤克巳とともに師と仰ぎ、私にとっては姉弟子にあたる沖ななもさんだった。「ななも」はもちろん筆名。由来は忘れたが、本名とは似ても似つかない。その縁もあってわざわざ埼玉県のほぼ最東部に位置する煎餅のまち草加から、東京を横断して、いざ鎌倉、とやってきたのであるが、理由はそれだけではなく、私個人の吉野秀雄への強い傾倒もあったのである。柿には悪いが、むしろこちらの理由が本筋である。

世間一般の人にどんな歌人を知っているかを尋ねたら、まずは「カジン」って何？と聞かれるのが関の山。「カジン」とは歌人と書き、短歌を作る人であるけれど、もしかして短歌ってわからない？ そうだな教科書的には和歌という……。などと説明しなければならぬ。短歌のなんたるかをわきまえていたとしても、どんな歌人が思い浮かぶかと聞いてみれば、与謝野晶子や石川啄木、若山牧水、斎藤茂吉、そして最近では依万智や穂村弘なんかが出てくればいいほうで、明治時代生まれの吉野秀雄の名前を挙げる人がいたとしたら、生地である群馬県高崎あたりの人か、長く秀雄が暮らしたここ鎌倉の人、あるいは詩歌についてさうとう詳しい人、はたまた鎌倉を舞台とし彼を主人公とした映画を見たことがある人、ということになるだろう。こういう人物を「知る人ぞ知る」というふうに言ったりするのは、まさしく吉野秀雄という歌人はそういう人物だった。かつて鎌倉にあった伝説の大学「鎌倉アカデミー」の教授でもあり、その教え子のひとり小説家の山口瞳で、その山口は「小説 吉野秀雄先生」を著している。吉野の教えぶり、慕われぶりを生き生きと描き出していた。

その吉野秀雄一代の作として名高いのが、歌集「寒蟬集」に収められた妻臨終の歌である。あとも登場してくる瑞泉寺の和尚、大下一真さんはこの歌について、「逝去の前夜、妻に求められて二人はまぐわう。命のきわみの壮絶な性愛である」と解説している。

これやこの一期のいのち炎立ちせよと迫りし吾妹よ吾妹

ほかにも哀切極まりない歌がいくつもある。

古畳を蚤のはねとぶ病室に汝がたまの緒は細りゆくなり

病む妻の足頭あしかぶにぎり昼寝する末の子をみれば死なしめがたし

この歌集に収められた歌の一部は、文芸評論家の小林秀雄が実質的な編集長を務めていた「創元」創刊号に「短歌百余章」として発表された。同じく鎌倉に住んでいた小林はこの原稿を受けとって、読み終わるなり山を駆けおりてきて吉野家の門を叩き、こう言ったという。「このなかに八首だけよくない歌がある！」つまり、あとの歌は残らず傑作というわけだが、このエピソードにはいくばくか誇張が忍び込んでいるかもしれない。だとしても、あの小林秀雄をしておおよそかく言わしめたのだとしたら、日本文学史上に印象すべき奇蹟といっても大げさではないかもしれない。小林の畏友、中原中也でさえ、ここまで高く評価されていたかどうかわからない。

母の前を我はかまはず絆よ切れし汝おのの口びるに永く接吻くちゅく

亡き妻を詠ってこれほどに痛切で美しい悲歌がほかにあるだろうか。こんなに尊い夫婦愛があるものか。

瑞泉寺には吉野家の墓があり、秀雄はここに眠っている。そして石段を登り切ったところ、山門の前の樹陰で小暗い一面には秀雄の歌碑が鎮座している。

死をいとひ生をもおそれ人間のゆれ定まらぬころ知るのみ

碑面に彫られた歌は、具体性のない観念的な歌であり、小林秀雄が激賞した歌の数々と比べると、平凡な歌のようにも思えるが、歌碑にはこれくらいの方がふさわしい。生々しい具体性は時と場所によってはむしろ興ざめになる。

私が吉野秀雄に傾倒するに到るにはひとりの介在者がいた。島田修三さんという歌人で、極めてユニークな短歌ものをする人である。かと思えば愛知県の私立大学で学長を務めていたり、万葉集を研究する学者でもある。

もつとマジメにやれといふか畜生！マジメに歌へど歌へば傾かたむく

おいそこの学部長、寝てんちやねえよとわが言はざれば酔かなり会議

これら諧謔的というか自虐的なユニークな歌ばかりではなく、本格的で真面目な歌ももちろんたくさん詠んでいる。このすこし傾いた実力派歌人に所属歌誌の企画でインタビュ―する機会があって、彼が歌を詠み始めるきっかけとなったのが吉野秀雄のあの絶唱だったという話を聞いたのである。島田さんはそれらの歌を書き写しながら何度も涙ぐみ、短歌が人を泣かせる力をもつという事実に天からの啓示のような思いを抱いたのだという。吉野秀雄はいい、ぜひ読んでみたまえと奨められ、その通りにしたら自分も涙ぐみながら読んでいたのだった。泣きながら自分の歌をつむいだことは珍しくないが、他人の歌を読んでもほんとうに涙がこぼれたのは初めてかもしれない。

島田修三、そして吉野秀雄。この縁がさらに新たな縁を引き寄せてくれた。同業者ばかり登場してくるのだが、歌人の山崎方代である。方代は「ほうだい」と読み、「かたよ」と読む女性ではなく、男性「方代」である。それ以前から名前だけは知っていた。なんとすれば、我が師加藤克巳より一年早く生まれた方代は、アンソロジーなどで克巳のひとつ手前に配されることが多く、そのため方代の名を目にするにはよくあったのである。しかし迂闊にも、その短歌はほとんど読まずにいた。これが急に、浅い縁から深い縁に変わるようになった。吉野秀雄の歌碑のそばには、山崎方代の歌碑もあったのである。

手の平に豆腐をのせていそいそいつもの角を曲がりて帰る

寄り添うと言えるほど近くはないが、二、三メートルしか離れていない同じ一画である。こうして出会った方代の歌は、そのころの私の心の空虚な薄暗がりじわっと沁みてきたような感じだった。

秀雄と方代。このふたりの歌碑が同じ一画に建っているのは、それぞれがそれぞれに瑞泉寺と関係が深かったからだけではなく、秀雄と方代の間にも深いつながりがあったからだろうと、個人的な願望ぶくみで私は思っている。方代は秀雄を師と仰いでいたようだが、師と仰がれて、では弟子と認めると秀雄が思っていたかどうかは分からないが、心情的な絆で結ばれていたのはいろいろな文献から容易に想像される。方代は秀雄の歌碑のそばに自分の歌碑が建てられるなどつゆ思わず死んでいっただろうが、こんなことになっていることをあの世から眺めたなら、それこそ「しめしめ」といったような表情を浮かべてご満悦なのではないだろうか。方代と瑞泉寺にまつわる様々なエピソードは、先ほどふれた瑞泉寺のいまの和尚であり歌人でもある大下一真さんの書いた『山崎方代のうた』に詳しい。大下さんは方代の研究誌『方代研究』の創刊にもかかわり、以来、編集を担当している。

こんな次第で山崎方代を深く知ることになった私は、自分の師匠以外では初めて全歌集を購入し、読み通した。方代はそれほどたくさんさんの歌を残してはいないとはいえ、およそ一千四百首を収めた全歌集を読み通すのは、なにかしらの縁や執着がないと難しいのだ。プロットを工夫して読者を先へ先へと引っ張っていく小説とはちがいで、短歌は一首一首が完結を目指す。同じような歌も多くある。背景を知らないといわれない歌もすくなくない。技巧の見せびらかしが目立ち、ひとりよがりな思い込みの歌も多い。他人が詠むのであるから、知らないことや興味の無いことも歌われる。とっつきにくい高踏的な詩語を駆使されて置いてけぼりにされることもある。おまけに、全歌集はけっこう高踏的な詩語を駆使された古書だったが、アマゾンで壱万円札式枚分ほどした。贅沢な夜の宴が数回分だ。

それでも全歌集を読み通した私は、人生を生きる苦しさからすこし抜けかけたように思った。こんな生き方がある。こんな生き方でもいいのか、と。そして、私だけがそんな解放を感じているばかりではなく、同じようにビジネス社会で苦しみを嘗めている人たちに読んでもらいたいと思ひ、「現代ストレス人に捧げる山崎方代の癒やし歌」なるエッセイを歌誌に書いたりした。

歌碑の歌以外の方代の歌をいくつか見てみよう。

瑞泉寺の和尚がくれし小遣いをたしかめおれば雪が降りくる

明日のことは明日にまかそう己よりおそろしきものこの世にはなし

卓袱台（しやくぶくたい）の上の土瓶に心中をうちあけてより楽になりたり

このようになまけていても人生にもっとも近く詩を書いている

死ぬ程のかなしいこともほがらかに二日一夜で忘れてしまふ

住職に金をせびるような金や家族的に恵まれぬ日々の生活の中でも、実際の自分をドラマや芝居の登場人物のように見立て、それを楽しんで眺めているような視点を持つことができれば、日々の暮らしは苦しいだけのものではなく、死にたい、死のうなどと考えることがばかばかしいとさえ思えてくるかもしれない。ストレス社会といわれる現代の、とくにビジネス関係でのストレスは、鬱や分裂症などの精神病に昂じる前に解消していくことができるのではないか。生きがたき世を生きる私たちの癒やしになりそうだと。「仮の世を演じて生きる者として自らを突き放してみなさいな」、「玉ねぎの皮を向くように自意識を一枚一枚はいていったら楽に生きていきます」、「俗名なんのなにがし、いまなんとか生きてます」と夕日や茶碗、虫に語りかけてみたらどうだい」。方代はそんなメッセージを、悩める人に送り続けている。たとえば、相田みつをの書「背のびする自分 卑下する自分 どっちもいやだけど どっちも自分」、星野富弘の画文「川の向こうの紅葉がきれいだっただけで 橋を渡って行ってみた ふり返ると さっきまでいた所の方が きれいだった」のように、すーっと楽になる作用が方代の歌にもある。みつをの書、富弘の絵を方代はもたないが、その代わり方代には方代短歌にしかない音楽がある。愛唱性といってもよいだろう。

豆腐一丁あればいそいそしてゐたる方代さんに救われてゐる

方代の歌碑の歌への私の拙い返歌であるが、この心境は次々とつながれた歌の縁がなければありえなかったのだから、縁の不思議を感じざるを得ない。そして、もう一つの縁の縁の話をした。

### 下谷法昌寺と哲久、泰樹。そして中也

もう一つの縁の縁の話ともったいぶったその話は、ここまで書いてきた本流の支流というより、もう一本の本流と言えるように思う。

曼珠沙華。この花がこちらの縁の仲立ちだ。

数年前、父の七回忌で帰った岩手県北上市の菩提寺で、墓地にはけっして珍しくない彼岸花が咲いていた。もちろん初めて見る花ではなく、曼珠沙華という異名を持つことも知っている。だが、そのときはじめて、花そのものが自分の存在に迫ってきた。肉親の死、それから七年の経過のあまりの速さ。そういった無常感のためにこの花の存在感が私のかに立ち上がったのだろうか。そのとき、私の胸に坪野哲久という歌人の歌が響いてきた。

曼珠沙華のするとき象夢（しやうむ）にみしうちくだかれて秋ゆきぬべき



知識として知っていたこの歌と曼珠沙華の花そのものが私の心をつかんで、そして揺さぶって、なかなか離さなかった。歌はいつの時も同じ感動をもたらすものではない。読み手の心の状態が整っていないと、ただの言語の羅列として通り過ぎる。婦りの新幹線のなか、インターネットで坪野哲久の歌を調べまくった。そして、この歌を塚本邦雄が絶賛していることも知った。私は坪野哲久の歌を全部読んでみることにした。この一首はどういう歌集のなかにあるか。彼はどんな歌集を出しているのか。短歌史の中で彼と彼の歌はどう位置づけられているのか。方代に続き、全歌集を買い、そして読み通した。彼の評伝まで買い求め、それも読み通した。なぜ私はそんなことができたのだろうか。単なる興味ではここまで執心できない。なにか運命的なことなのだ。目に見えないなにかに引っ張られていくのである。哲久の歌をいくつか引こう。

母のくにかへり来しかなや炎々と冬濟<sup>つ</sup>して太陽沈む

冬星<sup>ふゆぼし</sup>のとがり青める光もてひとりうたげすいのちとげしめ

風鈴は吊りさらされてわれのごとそその存在の霜夜の韻<sup>うた</sup>き

かなしみのきわまるときしさまさまに物象<sup>ぶつざう</sup>顕<sup>あ</sup>ちて寒<sup>さむ</sup>の虹ある

われの一生<sup>いっせい</sup>に殺なく盗<sup>ぬす</sup>なくありしこと憤怒のごとしこの悔恨は

残り生<sup>のこりせい</sup>が一年刻みとなりしこと妻とわらえりあとさきいずれ

哲久の歌を読んだり哲久について調べたりしているうちに、歌人の福島泰樹さんが哲久を敬慕し、哲久の死後は哀悼の文章や雑誌の企画をたくさん世に送り出していることを知った。恒歌と縁のない人でも名前だけは聞いたことがあるかもしれない、あの短歌絶叫コンサート<sup>たんかぜつ叫コンサート</sup>の福島泰樹である。この人こそ、『中也断唱』という歌集をもってして私を現代短歌の世界に引きずり込んだ張本人なのだ。ただし、引きずり込まれていたことを自覚したのは、『中也断唱』を読んだその当時ではない。それから三十年以上も経ったつい最近のことなのである。

さつき説明したとおり、私が所属する歌誌は有力歌人にインタビューする企画をここ何年か続けていて、私も島田修三さんなど有力歌人にインタビューを重ねてきた。そうこうするうち、自分にとっていちばん肝心な人に会っていない、誰だろうそれとはという疑問がもたげていたところに、哲久との機縁から福島泰樹という存在がにわか意識の前面に出てきたのだ。ただ、彼は歌の世界の指折りの重要人物であり、寺の住職であり、大人気を博している短歌絶叫コンサート<sup>たんかぜつ叫コンサート</sup>のパフォーマーであるから、おいそれとは会えまいと思っていたが、案ずるより云々というやつで意外にも話はトントン拍子に進んで会ってもらえることになった。話を聞きに行く前に、コンサートを聞いていなくては失礼に当たると、そもそも関心が強かったので、意気揚々とコンサート会場に向かった。コロナ下ということで入場者は会場の定員の半分制限されていた。あとで聞いたことだが、人数制限のためもあるだろうが、定員到達で入場できなかった人もかなりいたというから、短歌絶叫コンサート<sup>たんかぜつ叫コンサート</sup>の人気、推して知るべしだ。

中折れ帽に丸サングラス、ベージュのトレンチコート。舞台袖から福島さんが現れ、マイクの前に立つ。短い挨拶のあとピアノ、チェロ、ドラムの伴奏が始まると、コートを脱

ぎ、後方に放り投げる。円熟の役者のごとく実に様になる。ページュのサスペンダーで黒いずぼんを吊り、黒シャツは半袖。贅肉のない引き締まった軀。二の腕の筋肉の盛り上がりがすごい。これが七十代後半の人の体とは。それもそれはボクシングで鍛えた肉体なのだ。そして、長年にわたるコンサートでの絶叫と読経で鍛えられたよく徹る太い声が詩歌を朗読し、絶叫する。絶叫といってもわめくのではなく、朗読といっても文章を読みくですのではない。詩歌を唱うのだ。緩急をつけ、抑揚を駆使し、体を弓なりにそらしたり、床を強く踏んだり、万巻をこめて絶叫するのである。肉体と声・言葉、詩が一体となったパフォーマンス。歌は愛唱されるべきだという自らの信念を地で行くように、全身を駆使して詩歌を表現する彼だけの芸術世界が顕現する。中原中也や寺山修司、立松和平、村山槐多、岸上大作などすでにこの世にはない詩人も歌人も友人も、絶叫される言葉を通じて時間と空間を飛び越えていま眼前に邂逅する。ライブのパフォーマンスにこれほど心揺さぶられたことはなかったかもしれない。歌や演奏のうまさには感動することはあっても、魂の領域に踏み込んでくることはなかったように思う。日本のみならず世界をまたにかけて、この人はこの絶叫パフォーマンスを演じ、聴衆の心をつかんできたのだ。すさまじい人である。それが私の感想だった。書齋で美しい短歌をつむぐだけではない、まさに全身歌人だ。

そのパフォーマンスの興奮冷めやらぬ数日後、台東区下谷にある法昌寺に福島さんを訪った。最寄り駅は地下鉄日比谷線の入谷。私が日本橋人形町の職場へと通勤に使っている路線だ。彼に話を聞くために歌集・歌書・エッセイをたくさん買い込み、買えないものは図書館で借りた。しまいには全歌集も購入し、読み通した。短歌だけでなく散文も、その福島節が心地よい。この豊穡な福島ワールドを受容するうち、私は文学に関する自分史を修正せざるを得ないこととなった。

自分は加藤克巳の磁力で短歌の世界に導かれたとずっと思ってきたが、実はそうではなかったと気づかされた。十代の大学時代から卒業後数年のあいだの小説習作時代に出会った『中也断唱』こそが私と現代短歌との出会いであり、短歌世界への道標だったのだ。その時点で福島泰樹を目標としそのまま短歌の世界に入っていくという道に進まなかったのは、小説を書きたい、小説家になりたいという青二才の夢を捨てきれなかったからだ。

『中也断唱』は、中也の詩と中也その人を短歌に翻訳した歌を集めた歌集である。福島は自分の短歌的抒情の源流は伝統的短歌にはなく、萩原朝太郎や伊東静雄、中也から汲みとってきたと言明している。私も若い頃から中也の詩に惹かれていた。こんなブレーズが暗誦できるほどに強く記憶に印象されている。

汚れちまつた悲しみに

今日も小雪の降りかかる

汚れちまつた悲しみに

今日も風さえ吹きすぎる



頭倒さに手を垂れて

汚れ木綿の屋蓋のもと  
ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

秋の夜は、はるかの彼方に、  
小石ばかりの、河原があつて、  
それに陽は、さらさらと  
さらさらと射しているのであります。

思えば遠く来たもんだ  
十二の冬のあの夕べ  
港の空に鳴り響いた  
汽笛の湯気は今いずこ

ああ おまえはなにをして来たのだと  
吹き来る風が私に云う

これら中也の詩や中也その人が短歌形式に翻訳されるとこんな短歌になってゆく。

黒帽子黒マント纏け擦れ違ふあれなにならん黒南風ならん  
狂おしく来し方来し人想いおる鎌倉谷の夢見草われ  
たったひとりの女のためにあかあかと燈しつづけてきたるカンテラ  
死んだっていいようと涕く魂を労りながら黎明を待つ  
失ったものはかえって来ぬからにラアラア唱ってゆくのだ俺は  
さなり十年、そして十年ゆやゆん咽喉のほかに鳴るものも無き  
それでは御免 後の世には添いましよう矢来の彼方に降る雪もある

中也詩の音楽もさることながら福島短歌の韻律もメロディアスであり、他にだれもなしえない唯一無二の世界だ。これに心ひつつかまれていたのだ。そのまま短歌の世界に入れぼよかっと思わないではないが、もちろん、ん時は戻せない。結局、読んで感動を受けただけで通り過ぎてしまったが、あれから四十年近くたって、その影響が自分のつくる短歌に残っていたことを思い知った。三十歳直前に出した歌集『群青の宙』にもその影響が濃かったことにも気づいた。ひたぶるな感傷、俺という主体を前面に出した叙述。これは福島秦樹の世界そのままのようではないか。私の中に現代短歌の種をまいたのは福島秦樹だった。そこに水と栄養と光を与えてくれたのが加藤克巳とその門人たちだったのだ。



◆ ◆ ◆

福島さんは詩人オマーージュの歌集として、『中也断唱』のほかに『朔太郎、感傷』、『賢治幻想』も出している。石川啄木に関する歌や言及も多い。これら詩歌界のビッグネームは、岩手県に生まれた私と同郷の詩人として憧れやまぬ二人をふくめ、私の愛した詩人たちそのものである。福島さんは、これらの詩人たちを短歌や絶叫コンサートで現代に蘇らせ、私たちと邂逅させてくれるのだ。いまの自分の意識が、福島さんを通じて啄木、賢治という自分の詩心の原初につながった。賢治に帰ってゆける。啄木に帰ってゆける。そして中也にも。そのための意味ある回り道を俺は六十年弱かけて歩いてきたのだ。こういう人生だったのだなど、いままらちよと苦い後悔を含みつつも過去を認め、受け入れられる。いろいろさまよったけれど、帰るべきは故郷だったということなのかもしれない。福島さんは、「人体とはまさに、時間という万卷のフィルムを内蔵した記憶装置」「短歌とは、『時間という万卷のフィルム』を巻き戻し、その一駒一駒を鮮烈に炙り出す現像装置に他ならない」と歌集『亡友』のあとがきに書いている。万卷のフィルムの炙り出し。それが短歌であり、短歌は感傷なのだ。

#### 思ひ出は泉のごとく涌きいづるこの人生を歩み来にけり

そろそろ筆を翻こうと文章を読み返してみたらこんな歌が口を衝いて出てきた。まあ、六十手前の人間の嘘偽りない平凡な心境だろう。啄木と賢治に刺戟されたのか、いま妙に故郷が恋しい。故郷にいる人々、かつて故郷にいていまは亡き人たちが懐かしい。たまには母に顔を見せに帰ろう。母も八十半ばと年老いたから、私の顔を久々に見たならばきつと泣くのだろうな。それを思うと母には悪いが、すこしためらいが生まれる。さらばとて、泣かない母になってしまっただけでは遅いのだ。父の墓にもひさしぶりに参りたい。なんと声をかけようか。あの曼珠沙華はあのとさのように、炎の輪郭のような紅い花を咲かせて俺を持っていてくれるだろうか。